

マーソンの「中範囲の理論」再考 ——「著された理論」と「実際の探求過程」の媒介について——

河村 有毅*

マーソンの「中範囲の理論」は、理論と経験とを相互交流させる試みとして広く受け入れられてきた反面、その基本的な考え方を巡って多くの誤解を生んできた。本稿の目的は、理論と経験との相互交流に関するマーソンの考え方を「著された理論」と「実際の探求過程」の対照から捉えなおし、経験的事実を理論的に説明するとはどういうことか、マーソン理論の舞台裏にある思考の準拠枠はどのようなものであるかを明らかにすることである。明らかになったことは、以下の三点である。(1) 中範囲の理論は、論理的に組み立てられた著された理論と、混沌とした実際の探求との媒介に準拠して主張されていること。(2) この準拠枠は、「意図した行為の意図せざる結果」をなして、科学のエトス、思考の集合体、セレンディピティなど社会学者共同体の制度的構造によって媒介されていること。(3) これらの制度的構造が相互に機能しあうとき、「繰り返される社会的認識のパターン」があらわれてくると、その結果として中範囲の理論の「多元的認識構造」が形成されること。

キーワード：中範囲の理論，理論と経験の相互交流，著された理論，実際の探求過程，
還元主義者の虚偽，繰り返される社会的認識のパターン，科学のエトス，
思考の集合体，セレンディピティ，多元的認識構造

はじめに

本稿の目的は、ロバート・K・マーソン(1910-2003)の社会学全体を再構成する作業の一環として、マーソンの主著「社会理論と社会構造」(1949, 1957 = 1961, 1968)において、「社会構造」と並んで重要な位置が与えられている「社会理論」の概念を再検討することにある。マーソンの社会構造概念については、スティンチコム(1975, 1990)やR. コーザー(1975)、ストンプカ(1986)などによる議論が存在する一

方で、社会理論については、「中範囲の理論」としてよく知られている反面、これまで専門的研究があまりなされていない。数少ない先行研究として、ストンプカ(1986)とPaolo Ammassari(1998)の研究をあげることができるが、マーソンの議論を紹介する以上の作業は、今後委ねられているといっている¹⁾。

マーソンの社会理論がもつ魅力は、社会移動、社会制度、逸脱行動などの社会学的問題を、経験研究に根ざして捉えると同時にそれを一般的水準で論じることができる中範囲のパースペクティブにある。マーソンが、このような経験と理論双方の要求を満たす理論を中範囲の理論と

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

名づけ、パーソンズの誇大理論でもシカゴ学派の経験主義でもない、第三の社会理論を提起したことは周知のとおりである。

これまで中範囲の理論は、実証主義的社会学における理論・実証問題としてマートン外在的に検討されてきたが、それらは、中範囲の理論が論理的に不十分であるとか²⁾、より一般的な理論に統合する術がないとか³⁾、科学による知識の一元的支配とか⁴⁾、どれもネガティブなラベル貼りであり、中範囲の理論の不可能性、不十分さを強調するものであった。それに対して本稿は、マートンが科学社会学の見地から社会理論の革新を構想していたことを明らかにし、中範囲の理論のもつ可能性がマートン内在的に論じられることになる。以下では、本稿の観点や具体的な提示方法について述べておくことにしたい。

中範囲の理論は、科学的な社会理論のあり方として提起されたものであるが、このことをマートン内在的な観点で理解するためには、マートンの考える科学の社会学的概念が、どのようなものであるかを踏まえておく必要がある。一般に社会学で科学的方法を実践することといえば、例えば、ゼタバーグの「社会学的思考方法」が示すような、データを集めるためのテクニックやそれを一般化するための論理的操作など、科学哲学者のいう「科学」を社会学に導入することを意味している。しかし、中範囲の理論で主張されていることには、そうした「押し付け」的、「先生」的な「科学」がまったく存在していない。

科学社会学の創始者であるマートンにとって、科学は、科学哲学者のいう余所余所しい「科学」よりも、社会学者にずっとなじみ深いものといえる。マートンは、科学者が問題を選

択し、理論をデータで実証し、その成果を累積させていく科学の営みを「科学者共同体」scientific communityの構造として説明する。したがって、科学の営みは、社会学の扱うすべての社会構造と同様に、科学者によって自発的、主体的になされていても、社会構造に媒介された「意図した行為の意図せざる結果」なのである。このことが、これまで様々に主張されてきた社会理論のあり方とは異なった、中範囲の理論に特有の観点を与えていると考えられる。

「科学」の方法論は、主体と客体の二元論を媒介する原理を提示し、その原理を学べば科学をすることができると論ず。つまり、「社会学も科学の仲間入りをしたいなら、所与の経験的データ（客体）とそれを説明する理論（主体）を結びつけるかくかく云々の原理を学ばなければなりません」というわけである。こうした方法論がマートンの考え方と異なっている点は、「原理に従って行為するならば、結果として科学理論が手にはいるだろう」という仕方で、科学の営みを「意図した行為の意図した結果」として捉えようとすることである。

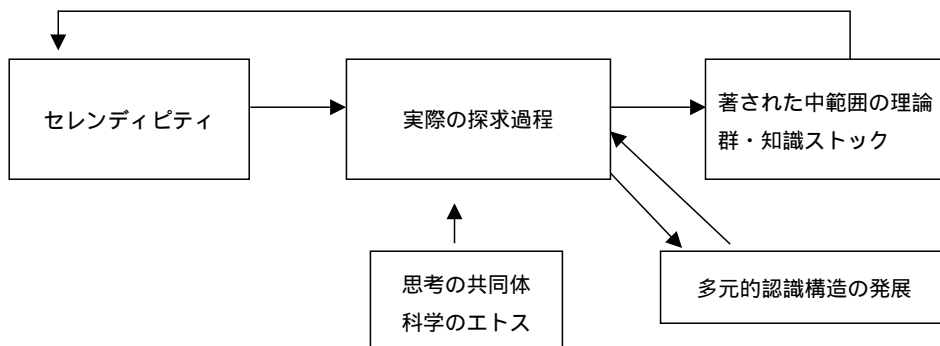
「科学」の方法論が述べていることは、探求をしたことのある人には皮相なものに映るはずである。すべての探求が二元論的認識の繰り返しであるならば、科学を实践することがどれだけ簡単なことだろうか。科学者が実際におこなっている探求は、誤っていることがあたりまえであって、いつ終わるとも知れない不安な世界で、散らかった断片のなかに隠されたチャンスをものにする過程である。問題が大きければ大きいほど、最初に意図したことは覆され、仮説を覆したデータを理解するためには長い時間を要する。最後に1つの論文が著される頃には、最初の意図とはまったく異なったものになって

いる。このことは、科学を「意図した行為の意図せざる結果」として捉えてはじめて理解することができる。「意図した行為の意図した結果」ばかりにこだわっていると、探求のこうした側面が見過ごされることになる。

本稿では、こうした観点から、科学の「意図した行為の意図せざる結果」という側面を準拠点にして、中範囲の理論の〈理論と調査の相互交流〉というテーマが再解釈されることになる。以下の議論の準拠枠は、マーтонаいう「公刊された科学研究の最終見解」「the finished version of scientific work as they appear in print」と「探求者による実際の探求過程」「the actual course of inquiry followed by the inquire」（以後、「著された理論」と「実際の探求過程」とする）の対照である。相互交流の過程は、この対照が科学者共同体の構造的脈略に位置づけることで社会的に論じられることになり、その具体的な提示方法は、議論をわかりやすくするために、スティンチコムの「マーтонаの社会構造論」における「コア・プロセス」を参考にして、以下のような仕方で、マーтонаいう「繰り返される社会的認識のパターン」recurrent sociocognitive patternを再構成することである。

第一のループは、科学者共同体が、「科学の

エトス」ethos of scienceと「思考の集合体」thought collectiveによって構造化されていることをあらわしている。マーтонаの科学に関する多くの議論から、この2つの概念を選んだ理由は、これらがそれぞれ探求の形式と内容を方向づけているからである。科学のエトスは、「要素還元主義」を要請し、探求の形式を経験的で論理的に首尾一貫したものへと方向づける。それに対して、思考の集合体は、科学者共同体でなされる相互行為にみられる潜在的な観念の構造であり、その機能は、社会学者に思考の準拠枠を与え、探求の内容を方向づけるものである。これは、マーтонаのオリジナル概念ではなく、マートンが翻訳に携わったLudwik Fleckの概念であるが、このループを考える上でなくてはならない概念なのでちいことにした。「セレンディピティ」は、実際の探求と思考の集合体とを結びつける特別な経験をあらわしている。それは、「偶然に新しい理論を発展させることや、既存の理論を拡充することになるような、予期されない、変則的な、戦略的データを観察するという、かなりありふれた経験をあらわして」（Merton 1968, p158 = 95頁）いて、実際の探求過程を理論へと方向づける契機をなしている。著された理論の知識ストックがセレンディピティへの因果的ループを形成するのは、セレ



ンディピティが、思考の集合体の相互作用によって創発した知識ストックによって形成されるからである。例えば、第一のループは、マーソンの逸脱行動論がとりわけデュルケムとマルクスの観念が創発した思考の集合体に方向づけられていること、アノミーの概念が文化的目標と制度的手段の二変数によって形式化されていることに見出すことができる。

第二のループは、探求が社会学者共同体の「多元的認識構造」pluralistic cognitive structureのなかで社会学的知識の歴史的発展と共に成熟する過程である。例えば、逸脱行動論は、サザーランドの分化的接触論、マーソンのアノミー機会構造論、ラマート、ベッカーのラベリング論など多元的な中範囲の理論群が構築されるなかで発展してきたが、中範囲の理論は、こうした現実の多元的認識構造が発展し、理論と理論の相互作用がなされるなかで成熟していく。

1 実際の探求過程と著された理論

マーソンの出発点をなす考え方は、「認識論的還元主義」への反対である。このことは、とりわけ「社会理論と社会構造」における最初の論文「社会学理論の歴史と体系性」に示されているが、自身の研究史を回想したエッセイ“A life of learning”(1994)で、つぎのようにはっきりと述べられている。

私の理論は、社会行動や社会構造のパターンに関して、単一の包括的説明を主張するいかなる急進的な社会学的、経済学的、もしくは、心理学的還元主義に対して、根本的に反対しています。私は、この反対に理由を与えるためにウィリアム・ジェームズの還元主義

者の虚偽に関する比喩に同意します：「ベートーベンの管弦四重奏は、厳密に馬の髭と猫の腸であり、それらの術語によって包括的に記述することができる。しかし、この記述を適用することは、まったく異なった記述を同じことに適用できる可能性を決して排除しない」(Merton 1995, p358)。

行為の準拠枠に還元するパーソニアンのアプローチ、刺激反応図式に還元する行動主義、行為者の主観に還元する主観主義、検証可能な直接経験に還元する論理実証主義など、社会学にも多くの還元主義が存在している。社会学者は、個人や社会を理解する上である要素への還元がもっとも重要であるとか、本質的なものであると主張してきた。しかし、マーソンにとって要素還元主義は、「主として受動的な語彙や報告の体裁を要請した科学的公刊の道徳に由来」した、その時代にみられる思考の先入見をあらわす科学者共同体の約束事であり、「実際の探求過程を見栄えよくする実践」にすぎない(Merton, 1968, p6)。

もちろんマーソンは、還元を約束事として相対化しても、科学が還元をもちいることを否定しているわけではない。実際、マーソンは、機能的結果への還元を推奨し、また、自身の理論でそれを実践することによって、還元主義の規範を支持している。

還元主義者の虚偽が問題にしていることは、理論的なものであれ、論理的なものであれ、ある還元の様式が認識論上の原理であるかのように主張されることである。これは、そうした主張の尊大さを反省させるために言われているのではなく、科学者の認識が、要素還元主義的な構造ではあらわすことができないために言われ

ている。科学は、方法論的還元主義を求めるが、認識論的還元主義ではあrawすことができないのである。

マーтона「社会学理論の経験的調査に対する意義」論文に基づいていえば、理論の要素還元主義的な構造は、第一に、理論の構成要素ないし変数であり、第二に、「2つ、またはそれ以上の変数間の関係について観察された斉一性を要約している個々の命題」をあらわす経験的一般化である（Merton, 1968, p149 = 88頁）。そこで「経験的とは、存在に関するある立言の主題が、繰り返し観察される特性の斉一的な結合をただ述べるだけで、何故この結合が生ずるのかの理解をまったく含んでいない」（Merton, 1968, p149 = 88頁）。そして、第三に、経験的一般化がより高次の抽象の中で概念化された、変数間の結びつきに関する一般的な立言である。これらが「著された理論」の骨組をなしている。

それに対して、「実際の探求過程」でなされている認識は、著された理論から逆及的に構成することができない。実際の探求過程は、科学者の錯綜とした思考の流れに支配されている。科学者は、実際の探求を行きつ戻りつするなかから命題を確立し、それをまったく合理的な形式にまとめあげてしまうが、その過程は、理論が著された後からでは考えられないほど遅々とした非合理的なものである。マー-tonは、植物学者アグネス・アーバーを引用して、その過程が一部の文学者たち、ローレンス・スターンや彼に影響をうけたジェームズ・ジョイス、バージニア・ウルフの言語化しようと試みてきた世界と同質のもの、つまり、「思考の網状に入り組んだ性質」から構成され、「時系列の拘束からはずれて循環する、複雑な人間精神の非線形的

行動」(Merton, 1968, p6)であると述べている。

著された理論の構成要素に関する経験が、視覚にはいつてくる机の上のリンゴ、書棚の本などの日常生活における物と同様に、最初から秩序だったあらわれをするのは、それらが観察者に習慣化されているからである。たとえ断片的なものであったとしても理論を知っていれば、それが習慣となって、たいして思考しなくても理論の構成要素を経験することができる。しかし、何も知らなければ、幼児が犬と猫の区別ができないのと同様に要素を経験することは難しい。

実際の探求過程の本質は、これを経験できるよう習慣形成していくことにある。この過程は、幼児が成長するにつれて、まったく無意識のうちに犬と猫を区別する暗黙の理論を習慣化していくことに似ている。唯一異なっている点は、実際の探求過程では、科学者が錯綜とした思考の流れを自覚的に統御し、習慣化された理論を言語化しようと努力する点である。

例えば、「予期的社会化」という概念は、「人々がまだ参加しているのではなく、やがて加入しそうな種々の地位や集団にみられる価値や態度を獲得すること」という命題によって定義されているが、その背後には、実際の探求で得られたアメリカ兵の調査資料が山のように存在している。著された準拠集団論だけをみると、そんなに大きな断絶が存在しているとは思えないが、マー-tonが再解釈する以前に、アメリカ兵の調査に施されたさまざまな解釈がアドホックなものであったことを考えてみると、そこには簡単に乗り越えることのできない壁が存在していたと考えられる。

これまでみてきたように、科学における実際の探求と著された理論との関係は、前者から後者への継起をなしている。著された理論は、変

数間の結びつきに関する一般的な立言によって構成されており、理論の構造は、経験的に確かめることのできる構成要素に還元することができる。しかし、「整除だった外観をした科学論文やモノグラフは、実際の探求に散乱した直観的飛躍や虚偽のはじまり、誤り、曖昧な終わり、そして幸運な偶然をほとんど再現しない」（Merton, 1968, p4）。実際の探求は、理論構築を目的とした合理的行為のようにみえても、結果からみれば錯綜とした非合理的な過程なのである。この対照が、本稿の解釈する科学の営み＝「繰り返される社会的認識のパターン」の準拠である。マートンは、こうした科学の営みには、互いに関連した4つの事柄が関係していると考え（Merton, 1968, p605 = 504頁）。

- （1）知識を確認するための特徴的な一連の方法
- （2）これらの方法の適用から生じた累積的な知識ストック
- （3）科学的とよばれる活動を支配する一組の文化価値とモレス
- （4）以上のもののいろいろな組合せ

このうちの（4）は残余範疇をあらわすものと考えられるから本稿では扱わないが、以下では、残りの3点の関連について考察することによって、最初のループを明らかにしていこうと思う。

2 科学のエトス

「科学のエトス」は、（3）科学的とよばれる活動を支配する一組の文化価値とモレスをあらわしている。それは、「科学者を拘束すると考えられている価値と規範の複合体であって、感情に色どられたものである。この規範は、

『すべし』、『すべからず』、『望ましい』、『して可なり』という形で表現され、制度的価値として正当化されている」（Merton, 1968, p605 = 505頁）。

科学のエトスは、（1）の方法論ではない。方法論は、一般に理論を構成する諸要素が何であるのかを定めるものと、諸要素の関係（経験的一般化）を確かめるための規準によって構成されている。例えば、行動主義の方法は、理論の構成要素を刺激反応図式に還元しているし、論理実証主義は直接経験、パーソニアンは行為の準拠であり、また、諸要素の関係を経験的に確かめるための規準には、検証や反証可能性、機能などがある。これらの方法論は、実際の探求過程を見栄えよくするための約束事である。

科学のエトスは、科学者に科学的還元を習慣化させるモレスである。それは、方法論の内容にコミットするのではなく、「方法論をとりまいているモレス」であり、方法論が領域や科学者集団に相対的であるのに対して、すべての科学に共通している。マートンは、以下にみていくように、「普遍主義universalism、共有性communism、無私性disinterestedness、組織化された懐疑主義organized skepticismという四つの制度的命令が科学のエトスを形作っている」と考える（Merton, 1968, p607 = 507頁）。

a. 普遍主義：それは、科学のエスノセントリズムを排除することになる。科学のエスノセントリズムは、「歴史的瞬間における特定集団だけが、ある種の知識へと排他的に接近することができる」という認識原理」（Merton, 1973, p102）を主張するが、科学の普遍主義は、研究者に「カエサルを理解するのにカエサルである必要はない」（Merton, 1968, p607 = 507頁）という考えを抱かせる。ソ連の政治指導者は、ロシア

国民主義を強化するために科学の「国民的性格」を強調したが、「科学者は、科学の普遍主義と民族主義的な特殊主義の相矛盾する至上命令に悩む」(Merton, 1968, p607 = 507頁)。階級的・国民的科学を主張することは、観念の秩序が1人1人の研究者や特定の研究者集団を超えた次元に位置することを否定し、探求を特殊な秩序を求めるものにかえてしまうが、科学のエトスは、研究者をしてそれに抵抗するよう働きかける。

b. 共有性：普遍主義を追及した結果として、探求は、普遍性を再現可能で共有できるものになっていく。法則や理論にその創始者の名を冠してあるからといって、それが発見者やその後継者の独占的な所有に帰するわけではないし、また科学のモレスからいっても、その使用や処分の特権が彼らに与えられるものでもない。科学における財産権は、科学のエトスの根拠にもとづいて、ぎりぎりの最小限に切りつめられている。

c. 無私性：科学のエトスは、科学者共同体以外から利害が介入してくることを排除する。

d. 組織化された懷疑主義：科学のエトスは、「事実が手中におかれる」までは判断を差し控え、信念を経験的、論理的基準に照らして客観的に吟味することを要請する。このことは、方法論上の指令でもあり、制度上で組織化された指令でもある。

これらの制度的命令が機能するとき、探求の成果をあらわす仕方が要素還元主義的な構造へと志向するようになると考えられる。実際の探求における思考の流れは、錯綜とした何かであり、その何かだけでは、結果がどのような理念型で著されてもおかしくない。しかし、科学のエトスは、それを一定の仕方で構成するよう実際の探求過程を構造化する。つまり、科学のエ

トスは、探求の成果をアドホックなものではなく普遍的・経験的な知識にするよう要請し、獲得された知識を組織的に検証することで妥当性を保障しようとする。そして、科学者たちにこれらが内面化されると、経験的に確証できる変数間の結びつきに関する一般的な立言を著すという「役割」が遂行されるようになり、また、その役割がはっきりと表現されるよう方法論の改善が適宜試みられるようになる。

科学のエトスを機能させる構造には、科学者共同体と関係した外部社会の構造と、科学者共同体内部の制度的構造との2つのものがあると考えられる。前者の問題を理解する上では、近代科学の誕生を宗教と経済の両面から取り扱ったマーтонаの博士論文「17世紀イギリスの科学、技術と社会」の議論があり、後者の問題については、マーтонаの科学の制度的構造を扱った種々の研究や、準拠集団論の構造的脈絡として論じられた「地位セット」や「役割セット」の議論がある。これらの構造は、科学が合理的知識を扱うため、社会とはまったく独立した営みであると考えのではなく、他の専門職同様に、合理的であるからこそ社会的に構造化されているという観点で論じられていると考えられる。科学のエトスとその構造的脈絡に関する議論は、重要なものであるが、本稿の問題を大きく超えたものなので取り扱うことはしない。それにかえて、以下の議論では、人文学と科学とを対比させることで、科学のエトスと科学に特有な合理的知識のストックとの関連を論じておくことにする。

探求の成果が科学とはまったく異なった仕方で著される可能性は、人文学と科学のはざまに位置する社会学の著作を考えると理解することができる。人文学的志向の強い「社会学の

説明が明快でなくて、長ったらしいものになりやすい傾向を助長しているのは、人間臭い光景のもついっさいの豊かさを伝えようとして、社会学の著作を生き生きと烈しい調子で書こうとする伝統である」(Merton, 1968, p69 = 50頁)。そうした著作には、著された理論を合理的に構成するのではなく、思考の流れそのものを著すよう命令する。そこには、科学のエトスとは異なった「人文主義のエトス」といったものが働いていると考えられる。

近代科学が、科学のエトスを制度化し、要素還元主義的な理論構造を促進してきた背景には、「知識の選択的累積」selective accumulation of knowledgeをしていく上で、それが一番効果的だったことが考えられる。科学であれ人文学であれ、すべての学問は、「知識ストック」を増大させていくことを重要な課題にしている。しかし、求められている知識のタイプがまったく異なっている。人文学が、ジェームズのいう「直接の知識」acquaintance withの累積を目的としているのに対して、科学は、ジェームズのいう「に關しての知識」knowledge aboutの累積を目的としている。ジェームズは、その違いをつぎのように述べている。

前者は、私が現象的—なじみや精通によって知られる知識の理解—とよぶものである。そうした理解は、後者と比べてより現象的・身体的コミュニケーションに近く、純粋な知性的なものではない。それは、私たちの心に映る、象徴的な、イメージにおける感覚への直覚や表象の知識である。後者は、私たちが判断や命題において表現するもの。いかなる必然的想像の表象もなく、概念(begriff, concept)において表現されたもの。知識の

知的理解をその素性としている(James 1978, p184)。

科学が「に關しての知識」を累積するために、要素還元主義的な理論構造を著そうとし、人文学が「直接の知識」を累積するために、思考の流れそのものを著そうとすることは理にかなっている。科学者共同体と人文学者共同体は、それぞれの目的を促進していかなければならないが、それぞれの研究スタイルは、それに添うような仕方では構造化されている。「より厳密な科学においては、遠い過去の理論や発見物が現在の累積的知識のなかに合併されている。そのため、過去の偉大な貢献者への祝福は、その領域の歴史として保管され、科学者は、自身の研究や論文において、主に過去の発見を発展させたより新しい論文を利用する」(Merton, 1968, p28)。ところが、「人文学においては、これと反対に詩、戯曲、小説、エッセイ、歴史研究などの古典が、後世の人文主義者の直接経験に不可欠な要素として残っている。・・・要するに、古典と直接になじみになることacquaintance withは、物理学や生物学の科学者の研究において小さな役割しか果たさないが、人文学者の研究においてはとても大きい役割を果たしている」(Merton, 1968, p28)。

しかし、こうした研究スタイルの違いが、科学者の知識を「に關しての知識」だけに、人文学者の知識を「直接の知識」だけに限定しているわけではないと考えられる。どちらも同じ人間行為の所産であるから、人文学も概念的構成をもった言語を使用しているし、科学者の思考にも「直接の知識」が存在している。マートンは、科学における「直接の知識」の役割に言及していないが、科学者は、対象となじみになる

だけでなく、知識ストックからの「直接の知識」を人文学者とは異なった仕方では得ていると考えられる。それは、科学者共同体と密接に結びついた知識ストックが、科学者同士の相互交流を通して、個々の科学者となじみになっていく過程である。この過程の結果として、個々の科学者に新しい探求の出発点が与えられ、また、理論構造に内容がもたらされると考えられる。次の章では、「思考の集合体」の概念に注目することで、このことを論じることになしたい。

3 思考の集合体

「思考の集合体」Thought Collective は、「観念を相互交換し、知的相互作用を維持する人々のコミュニティ」であり、「個人から成り立っているが、単なる個人の総計ではなく、(2) 累積的な知識ストックが創発した観念の秩序をあらわすものである (Fleck, 1979, p39, p41)」。その機能は、科学者の「思考様式」を形成し、「あらゆる領域にみられる思考の歴史的発展に対して特別な『運搬人』」(Fleck, 1979, p39)としての役割を果たすことである。思考の集合体は、意図して形成されたのではなく、潜在的に形成されたものであるため、集合体の存在は、個人に意識されていない。また、「集合体のなかの個人は、用いられている思考様式をほとんど意識しない」(Fleck, 1979, p41)。

フレックは、思考の集合体を仮説的に擬人化して議論をすすめているが、フレックのアイデアを、前の章であげたジェームズによる知識の二類型をもちいて考えてみると、思考の集合体と科学者のあいだに1つの「行為 - 構造問題」を見出すことができる⁵⁾。

1つの理論を知ることは、理論を知る主体が、

何らかの理論を明示的なものでなくても知っているため、それがどんなに厳密な構造をあらわしていても、その論理構造を複製する以上のおこないを含んでいる。そこでは、どんな場合であっても、主体の知っている理論と知られる理論との出会いが存在し、主体は、その出会いによって知られる理論「に關しての知識」だけでなく、理論と理論の差異が作り出す「直接の知識」を獲得している。このことは、より大きな科学者集団のレベルに適用されても、そこで累積された理論に關しての知識と、それらの理論の差異が作り出す直接の知識としてあらわれていると考えられる。

個々の科学者が、ある科学者集団を準拠集団として選択するとき、科学者集団の提供する準拠枠には、集団固有の思考様式が含まれている。思考様式は、科学者にほとんど意識されないものであるから、累積された理論「に關しての知識」ではなく、言語化されていない「直接の知識」をあらわすものと考えられる。準拠集団の与える準拠枠は、人々に行動基準を与えるものであるから、科学者は、準拠集団に相対した思考様式によって「さらなる知識の基礎を築くために、まだ知られていないが知られる必要のあることについての明白な認識」をするようになると考えられる (Merton, 1995, p51)。こうした準拠集団過程を思考の集合体と科学者をつなぐ第一のリンクと考えることにしよう。

思考の集合体と科学者をつなぐ第二のリンクは、準拠集団過程の結果もたらされるものである。その結果だけを述べることは簡単にできる。つまり、「例えば、マルクス主義の構造分析が、日常のルーティン化された社会的相互作用よりも階級構造における変化に専念することを選び、また、エスノメソドロロジーが、ダイナ

ミックな階級構造の変化よりも日常生活における諸個人のルーティン化された相互作用にあらわれる暗黙のルールに専念することを選ぶことは、偶然のことではない」（Merton 1976, p140）ように、準拠集団に相対した理論が著されるということである。問題は、準拠集団過程の結果として、実際の探求過程に何がおこり、また、どのような仕方での思考の集合体に相対した認識と理論が生み出されていくかである。このことを考えるには、この結果を前提にしたとき、それを生み出す実際の探求過程における科学者の行為と、科学者をとりまく状況の両面を考えていく必要がある。

科学者の行為を理解するには、まず、思考様式が、実際の探求過程における思考の流れに対してどのような役割を果たすか見定めることが重要である。思考様式のあらず準拠集団固有の直接の知識は、現象的・身体的コミュニケーションに近いものであるから、概念的な知識は皆無であるか、言語化されてもトートロジーに近いような曖昧なものである。しかし、それらは、科学者を特定対象の探求に向かわせる役割を果たすとともに、科学者の無意識にまだ著されていない暗黙の理論を形成していると考えられる。

その一方で、実際の探求過程には、直接の知識のもう1つのあらわれが存在している。それは、対象となじみになる過程である。社会学におけるフィールドワークや文献解釈、自然科学における実験などがこの過程をなしていると考えられる。そこでは、犬と猫を区別する理論をもたない幼児が、犬か猫か定かでない何かを経験しているように、まだ理論の構成要素となっていない経験が思考の流れのなかにあらわれている。

科学者の行為が準拠集団に相対した理論を著すことは、この2つの直接の知識が会う過程として考えると理解することができる。実際の探求過程には、まだ言語化されていない暗黙の理論と、まだ理論の構成要素となっていない経験とが会う瞬間があるのではないだろうか。それは、暗黙の理論が内面化されているばあいに限って、ある対象となじみになった思考の流れに、特別に個性的なあらわれをする経験が、偶然にあらわれる瞬間である。この出会いは、まったく予期されないものであるほど、科学者に驚きを与える。また、偶然のものであるほど、これまでの習慣とは異なっている。しかし、暗黙の理論と偶然の経験とを結びつける何かが、科学者に驚きとともに理論的な可能性を感じさせ、理論を拡充させる新しい探求へとむかうよう圧力をかける。

マートンは、この偶然の出会いを「セレンディピティ」serendipityとよんでいる⁶⁾。リンゴの落下を観察したことがきっかけとなって、万有引力の法則を発見したニュートン、入浴中にアルキメデスの原理を発見したアルキメデスなど、科学史には、多くのセレンディピティが存在している。ここで述べたセレンディピティは、主体の内部でのあらわれに止まるものであるが、マートンの関心は、科学者共同体におけるセレンディピティのあらわれである。このことを明らかにするには、もう1つの問題、つまり、科学者をとりまく状況を考える必要がある。

科学者をとりまく状況は、思考の集合体の構成する制度的構造である。科学者の活動には、分業、共同作業、議論、公刊など多くの社会構造が関わっている。これらの制度的構造を介して觀念の相互交流が盛んになされるとき、「思想は、1人の個人から別の個人へと伝わるたび

に、個人が少し異なった連想をつけくわえる可能性があるため、少しずつ変化する。厳密にいうと、受取人は、送り人が意図した仕方では決して理解しないのである。そうした出会いが重ねられていくうちに、もとあった内容は事実上失われてしまう。・・・1人の個人が構成したものが真であれ偽であれ、正しい理解であれ誤った理解であれ、一連の発見物は、共同体をあてもなくさまよい、洗練され、形をかえ、強化され、もしくは、弱められていく」(Fleck, 1979, p42)。セレンディピティの科学的発見は、こうした構造化された状況によって、促進されていると考えられる。マートンは、構造化された状況とセレンディピティを発見する科学者との関係について以下のような問題提起をしている。

セレンディピティの社会学的分析は、社会的環境が特定の行動結果の可能性を増減させる程度の違いに関する一般的な社会学的問題の特殊ケースを提起する(社会学の業界では、「行為—構造問題」として知られている)。もっと特定しておけば、セレンディピティの科学的発見における「偶然の構成要素」が高い割合で生み出されるとき、どのようなタイプの社会的認識のミクロ環境がそれを促進するのかという社会学的問題が提起される(Merton, 2004, p261)⁷⁾。

これは、マートンの機会構造論における行為構造の相互作用を念頭において述べられていると考えられる。それは、つぎのような構成に要約されるものである。

「社会構造とアノミー」における] 構造

的脈絡と個人行為との相互作用を理論的形式として発展させると、(1) (多様に変化する) 機会のアレイは、行為する諸個人—近年よくいわれているエージェンシー—to 立ちはだかる客観的条件をあらわす。(2) 行為する個人は、社会構造における位置によって種々のタイプの機会に接近することを阻止されたり促進されたりする。(3) 社会構造は、地位セットによって個人を位置づける(例えば、階級、性別、人種、民族、年代、宗教等々といった社会的属性のアレイ)(Merton, 1995, p154)。

ここで機会opportunityとよばれているものがセレンディピティに、地位セットが思考の集合体に置き換わることで、「社会的認識のミクロ環境」の輪郭を描くことができる。問題は、ある種の社会構造に位置する個人に偶然の発見が多くもたらされる場合に、その社会構造を他と区別させる要素が何であるかを特定することである。マートンは、このことについて分析を完成させずに他界してしまったが、そこであげられている例をいえば、もともと物理学者であったクーンを、ハーバード大学の特別研究委員の会での経験を境にして、科学史及び科学社会学に転じさせ、「科学革命の構造」の考え方を与えたものが何かということである。マートンのみるところ、それは、この特別研究委員の制度が、さまざまな分野の研究者が集まり、相互交流することで、セレンディピティを促進するような社会的認識のミクロ環境を構成していたことである。その特筆される結果は、クーンがここで参照してきたフレックの著書を偶然に発見したことに見出すことができる。マートンは、つぎのクーンの言葉を引用している。

〔科学革命についての〕確立された文献目録など存在していなかったため、私の読書は、探索的なものであり、しばしばセレンディピティに負っていた。マートンの「科学、技術、社会」の脚注が発達心理学者ピアジェの研究に注目させた。マートンの本は、将来の科学史家にとって明らかに必要なものであったが、ピアジェのそれはそれほどでもなかった。まったく想像もできなかったことは、その脚注がフレックに注目させたことだ。私は、それをハンス・ライヘンバッハの「経験と予測」のなかで見つけた（Merton, 2004, p263-264）。

セレンディピティの概念は、理論と調査の相互交流という中範囲の理論のテーマについてのマートン特有な考え方の根幹をなしていると考えられる。セレンディピティは、対象の熟知と理論的に鋭い感覚との出会いがもたらすものである。そのためには、理論研究ばかりをして「われわれのいうことが真実かどうかはわからないが、しかし少なくともそれは重要な意義をもっている」と言っていてはじまらないし、「事実はしかじかかくかくであって、それは論証できるが、その言葉を指摘することはできない」と言っていてはじまらない。「経験的とは、存在に関するある立言の主題が、繰り返し観察される特性の斉一的な結合をただ述べるだけで、何故この結合が生ずるのかの理解をまったく含んでいない」（Merton, 1968, p149 = 88頁）ものであるが、セレンディピティの考え方からすると、それがわかっているならば、理論化の方向性は大方定まっているといっていよい。重要なデータだけが先にわかっていて、理論が後からついてくるということではなく、膨大な調査資料の中から重要なものを選び出すことは、ま

ざれもなく理論の機能なのである。この点からすると、社会学で普通におこなわれている理論と調査の分業体制は、社会学的知識の発展に対して機能的な構成がなされていないのかもしれない。

マートンが別の論文で示した見解は、これよりも進んでいる。それは、こうした相互交流がなされていく結果として、社会学における「多元的認識構造」が構成されることと、そうした構造においてなされる知識の発展過程に関する考察である。次の章では、この多元的認識構造について取り上げることにしたいが、以下では、それに先立って、これまで論じてきた事柄を「繰り返される社会的認識のパターン」としてまとめて、多元的認識構造へと機能する機能的項目を確定しておくことにしたい。

前の章でみてきたことが、科学のエトスの機能によって、無知を知識に置き換える過程が促進されることにあるとするならば、この章でみてきたことは、思考の集合体の機能によって、反対に知識ストックが無知をつくりだしていく過程といえる。マートンの考え方の中心にあるのは、科学のエトスと思考の集合体の制度的構造が組み合わされて、「社会的に規定された科学者の役割が、知識を増大させることと、無知を特定することとの両方を要求」（Merton 1995, p56）し、そして、それらが、科学者が行為する中で相互に機能し合い、知識の選択的累積が推し進められることである。マートンは、このことを要約して、つぎのような「繰り返される社会的認識のパターン」を述べている。

ある特徴的な思考様式の発展に協同して従事させる思考の集合体が構築された結果として、特定の理論的方針が研究領域における十分な数

の研究者達の焦点となり、探求を要するさまざまなキー問題が生み出されるようになる。理論的方針がその用途を拡大するにつれて、より一層の潜在的問題が特定可能になる。逆説でも何でもなく、新しく獲得された知識は、新しく獲得された無知を生み出す。ある研究領域の内部で知識や理解が増大することは、同時に特定可能な無知と特定化された無知、つまり、まだ知られていない理解されていない事柄と、知る価値のある事柄への理由づけをもたらすのである（Merton, 1981 : v）。

これに付け加えておくべきことは、思考様式が重要な無知を認識させる一方で、研究者の無意識に暗黙の理論を形成し、セレンディピティの実りを探求にもたらすこと。科学のエトスが、セレンディピティを言語化する際の様式を規定すること、以上の二点だろう。

4 多元的認識構造

科学は、実際の探求過程を通して、これまで述べてきた科学のエトスと思考の集合体に媒介されながら、知識を累積させていく社会的活動であるが、このことは、共同体による「多元的認識構造」を必然的に仮定するものである。なぜなら、認識が、無知を知識におきかえる過程だけで構成されているならば、それを可能にするような1つの概念図式を求めるだけでよいが、その成果として獲得された知識は、これまでに累積された知識と創発して、新たに探求されなければならない無知を生み出していくからである。

このことは、例えば、パーソンズが、「漸進的に接近しうる科学的理論の発展目標は、科学

からすべての残余範疇を取り除き、それらを積極的な形で定義して、経験的に検証可能な概念に作り上げていくこと、これである」(Parsons, 1968, p19 = 41頁)とし、著した1つの体系が、彼の意図に反して、マートンを含めたその後の社会学者に多くの問題、多くの無知を残したことによってあらわされている。完全に意図された行為、完全な計画が現実には存在しないように、1つの理論的方針が思考の集合体すべてを孕み尽くすことは、遠い未来の理想にすぎない。意図した行為は意図せざる結果を生み出し、著された理論は新しい問題を生み出す。マートンは、パーソンズと異なって終始一貫して「理論多元論」を支持し、「多様性が人間行為と社会のまったく異なった側面を照らし、単一のパラダイムでは気づかれなかった側面が含まれるようになる」ことを強調していた（Merton, 1976, p140）⁸。

マートンは、社会学における逸脱行動論がこの理論多元論の好事例をなしていると考える。逸脱行動という事実は、サザーランドの分化的接触論、マートンのアノミー機会構造論、ラマー、ベッカーのラベリング論など、さまざまの中範囲の理論によって構築され、発展してきたといえる。それは、以下にみていくような、無知が知識に置き換えられ、知識が無知を生み出していく、多元的認識の過程である。

[E. H. サザーランドの理論において] その中心問題は、逸脱行動のパターンが他者から学習されることを通して社会化がなされる様式を調査することであった。・・・サザーランドのこうした逸脱パターンの取得という焦点は、パターンが最初にあらわれる仕方について、大きな特定化された無知をそのまま残した。

マートンは、アノミー - 機会構造の理論を提示した。それは、文化的に誘導された個人的目標を達成する上で、社会的に合法の通路を制限された社会構造に位置づけられるほど、種々のタイプの逸脱行動が高い割合を示す傾向にある、というものであった。[逸脱行動の構造化された源泉というアプローチには、] こうした不正行為のパターンがどのように伝達されるのか、どうして社会的基準からの初期の逸脱が、しばしば逸脱キャリアのなかで明示化されていくのか、これらについてほとんど何もいわれず、さらにもうひとつの特定化された無知の領域をもたらした。

この展開された問題は、ラベリング理論によってとりあげられた・・・それは、人々が「非行者」「犯罪者」「精神異常者」としてラベルづけされることによって、社会的アイデンティティを与えられる過程と、そうしたスティグマに反応して逸脱キャリアを開始する仕方とを焦点にしている。・・・[しかし、] ラメルトが無知を特定しているように、「道徳観念が強調されたり弱められたりすること、逸脱の定義が変化していくことに関心が向けられたとき、ラベリング理論やエスノメソドロジーは、その過程をほとんどあきらかにできない」(Merton, 1995, p54-55)。

マートンは、こうした多元的認識構造における相対的状況が、たとえ、対立と衝突を伴う社会学の危機であったとしても、社会学的真理に達する唯一の理論的方針を約束することより望ましいものだと考えている。もちろん、それは「ある種の無制限な理論的アナーキズムを記述し、支持しているのではない」し、また、逆にどこかに科学を基礎づける方法論が存在すると

いっているわけでもない(Merton, 1976, p142)。マートンのみるところ、「これまで、どの科学の成長モデルも、さまざまな学問分野における、もしくは、時期を異にした同じ学問分野における学説上の多元論の程度をうまく説明してこなかった。・・・[しかし、] どの科学の成長モデルも、競争的で時には闘争的な相互作用をおこなうパラダイムの多様性は、証拠について多かれ少なかれ共通した判断基準や原則に支配されており、それは、論争する知的伝統間の差異を超越していると主張する点では同じである」(Merton, 1976, p141)。つまり、科学を基礎づける方法論と知識の一元的直線の発展モデルのベアを捨てたとしても、多元的認識構造のなかで科学を成長させる何か、暗黙の理論と偶然の経験とを結びつける何かが作用しているとしたか考えられないのである。マートンは、脚注でこのことについて、「どうあっても、この仮定を信頼して合意しようという強い気持ちをもったのは、長年にわたって継続してなされてきた活発な議論による検証から得られたものである」(Merton, 1976, p142)とコメントしているが、これまでの議論から考えると、これは、科学者共同体の構造が適切に機能することにあると考えられる。つまり、研究者に科学のエトスが内面化されていれば、探求の成果を著す仕方は、より普遍的、公共的なものを目指すようになり、他の研究者がそのように探求しているかどうかを見る(懷疑する)ようになる。また、それを適切に要約するような方法論がまとめられるようになる。そして、思考の集合体が組織化されるほど、探求における問題解決がより一層大胆になされ、また、その結果として思考の集合体がより複雑なものへと発展していく。科学には、こうした作り作られる弁証法が働いている

としか考えられないのである。この確信が、マートンが中範囲の理論によって、「一方の社会学理論の歴史と、他方の現在用いられている理論の組み立て方との、はっきりと区別できるが相互に機能しあった状態を提示する」(Merton, 1968, viii)と主張したことの根拠になっていると考えられる。それは、絶対的なものではないにしても、科学史や科学社会学から引き出されたより望ましい提案である。

おわりに

これまでの議論によって、中範囲の理論を構成する構造過程が明らかにされた。以下では、本稿の見解に照らして、理論と調査の相互交流という中範囲の理論のテーマと関連したいくつかの問題を検討していくことにしたい。

・著された理論の構造は、人間行為の結果のなかでももっとも合理的なものであるが、それが生み出される実際の探求過程は、まったく人間的・非合理的な営みをあらわしている。マートンが「中範囲の理論の主な用途は経験的研究の道案内をすることにある」と述べるとき、理論と経験の対照は、この「著された理論」と「実際の探求過程」の対照にあらわれる「意図した行為の意図せざる結果」を準拠枠にして理解されるべきである。

・「経験的調査は理論を検証し、テストするという受動的な役割をはるかに超えている。調査の仕事は仮説の確認、反駁につきるものではないというのが私の中心的な論題である。調査は能動的な役割を果たす」(Merton, 1968, p157 = 95頁)。マートンがこのように述べるとき、経験は、論理実証主義の考える理論の構成要素をなす「直接経験」とは異なっている点が注意さ

れるべきである。実際の探求過程でなされる錯綜とした思考の流れやセレンディピティは、著された理論を確証するときに経験される事柄では再現することのできないものである⁹⁾。したがって、経験研究は、理論から演繹された仮説をテストするだけのものでもないし、また、ありのままに存在する経験的データを集めてきて理論へと帰納することでもない。経験的調査における理論的な実りは、社会的現実への熟知と思考の集合体に導かれた理論的に鋭い感覚との出会いによってもたらされているのである。

・社会学における思考の集合体は、中範囲の理論を推進していくとき、その発展が約束される。デュルケームやヴェーバーの時代、社会学の思想は、「著された思想の表象」として存在した偉大な社会学者とともに存在していた。そこでは、著された理論と思想体系、思想家のカリスマ性とが未分化のままバラバラな社会学を構成していた。しかし、彼らの思想体系が創発して作り出したものは、1つの大きな思考の集合体であったと考えられる。マートンが、「われわれは、皆、デュルケームやヴェーバーの遺産受取人なのである。彼らの仕事を与えてくれるアイデアをわれわれは追跡しなければならないし、彼らの仕事は、理論化の戦術を例示し、問題の選択にあたってモデルを提供してくれている」(Merton, 1968, p68)と強調するとき、この思考の集合体の存在が強く意識されていたと考えられる。

パーソンズも、この問題の重要性を認識して社会学の新しい展開を試みた数少ない社会学者である。しかし、バラバラの理論体系を1つのより大きな体系へと統合しようとしたパーソンズの試みは、その理論的意義を置くとしても、もう1つの体系を樹立した点では、創生期のア

アプローチを踏襲したものにはすぎないといえる。1つの理論体系は、それが実り豊かなものであるほど、対抗する理論群やこれまでの知識ストックと創発して、探求されなければならない新しい問題を構成していく。こうしたことを考えると、「繰り返される社会的認識のパターン」のなかで、中範囲の理論の多元的認識構造を促進していく限り、社会学的知識の発展は約束されると考えられる。

注

- 1) ストンブカの “Robert K. Merton An Intellectual Profile” (1986) は、結語において認識論者としてのマートンをつぎのように考えている:「マートンの考え方は、急進的な実証主義の伝統に由来するものでは決していない...マートンの研究に一般的なカテゴリーによる分類が必要であるならば、パーバーのもちいた『プラグマティズム』がより望ましいだろう」。(Sztompka, 1986, p248) ストンブカの分析は、マートンの社会学にプラグマティズムを見出すところで終わっている。しかし、別のところではマートンの認識論が「社会学的新カント派」と述べられていたり混乱している。
- 2) 高坂健次「マートンの『中範囲の理論』をめぐって」(1987)
- 3) 稲上毅「マートン・パラダイムと中範囲の理論」(1996)
- 4) 橋本満「『中範囲の理論』の構想力」(1998)
- 5) フレックは、「認識は、知ろうとする主体と知られる客体との二元的関係だけで構成されてはならない。現存する知識の蓄積[思考の集合体]が、あらゆる新しい知識の基盤的要因としてこの関係における第三の仲間でなければならない」(Fleck, 1979, p38) と述べている。フレックの議論は、議論を進めるための便宜的な手段として思考の集合体を実体化しているが、こうしたアプローチは、マートンが「社会的認識」という言葉で考えていることとは、異なっているように思われる。
- 実際の探求過程や著された理論、セレンディピティ、理論多元論などマートンの社会的認識論に特徴的なタームをつなげていくと、「マンハイムは知識社会学から認識論的帰結をひきだすに当たって、いろいろな二律背反に陥ったようであり、それは未だ解決されていない。...彼は知識社会学を適当に拡充すれば、それから認識論の真の革命が出てくると思っていたが、この認識論は大ざっぱな輪郭についていえば、アメリカ人にとって暫く以前からごく普通なものになっていた認識論だといえる。つまりデュイとミードに媒介されたパースとジェームズの認識論なのである」(Merton, 1968, p562 = 465頁) という記述が思い出される。プラグマティズムは、思考を経験との結びつきにおいてのみ理解できると考える立場であるが、マートンは、このプラグマティズムと、思考を方向づけ活動させる際に社会構造の役割を分析したマンハイムの知識社会学との接合を提案しているのである。この点がマートンとフレックの社会的認識概念の違いをはっきりあらわしていると考えられる。
- 6) 「このパターンの諸要素を述べることは容易にできる。まず第一に、データは、予期されないものである。ひとつの仮説をテストしようとする調査は、偶然の副産物すなわち予期されなかった観察をもたらす。そして、これが調査の開始された当初にはなんら問題となっていなかった理論の創造に影響するのである。

第二に、この観察は、変則的であり、驚きの感を抱かせる。そのため、一般におこなわれている理論と矛盾しているか、あるいは確証されている事実と矛盾している。いずれの場合でも、目につく矛盾は好奇心を引き起こす。すなわち研究者を刺激して、「データが意味をなす」ように、これをより広い知識の枠組の中へ組み込もうとさせる。・・・

第三に、当然ではあるが、予期されなかった事実は、一般化された理論に影響を及ぼす示唆を与えるという意味で、戦略的でなければならない。もちろん、それは、データそれ自体によってではなく、観察者がデータにもたらすもの

によってである。したがって、それが、個性的なものの中から普遍性を感知するために、理論的に鋭い感覚をもった観察者を要求することは明白である」(Merton, 1968, p158 = 95頁)。

- 7) マートンは、“The Travels and Adventures of Serendipity - A study in Sociological Semantics and the Sociology of Science”(2004)のあとがきでこのことに言及している。マートンにとってセレンディピティは、とても重要な概念だったようである。この著書におさめられた論文は、50年代に教え子であるパーバーとの共著で書かれたものである。
- 8) パーソンズは、彼のアメリカ社会学会会長就任講演において、つぎのように社会学の現状評価と処方箋を与え、理論一元論を期待し弁護した：「現在は、理論群に取り組む時代、つまり、多様な人々が概念図式の研究を批判的に討議しあう時というより、理論的関心を有した専門家集団が、その共通課題としてひとつの理論への取り組みを試みるのに円熟した時であると考えられる。・・・単一の主要な概念構造の発展に集中することへの高い見込みが存在している」(Parsons, 1947, p157)。そのコメントを引き受けたマートンは、中範囲の理論を主張し、多元論を擁護した。
- 9) マートンの中範囲の理論は、すべての近代科学に共通した構造を前提としている点で、「統一科学」を推進した論理実証主義とよく似ている。しかし、科学を特徴づける仕方が、論理実証主義とはまったく異なっている。論理実証主義は、いかなる科学理論も「検証可能」な観察文に還元することができ、諸科学の内部に1つの共通した論理があると考えて統一科学を主張してきた。マートンも科学的還元の重要性を認めているが、それは、科学者共同体に相対した約束事から成り立っており、その方法が「検証」に限られているわけでもないし、要素が彼らのいう「直接経験」に限られているわけでもない。マートンにとって、科学を統一するものは、実際の探求と著された理論とを媒介する科学者共同体の構造である。

参考文献

- Merton, Robert. K (1968) “Social Theory and Social Structure” Free Press 森東吾他訳 (1961) 「社会学理論と社会構造」
- _____ “The sociology of science theoretical and empirical investigations” (Edited by Norman W. Storer)
- _____ (1976) “Sociological Ambivalence and other essays” Free Press
- _____ (1981) “Remarks on Theoretical Pluralism” SAGE
- _____ (1995) “On Social Structure and Science” University of Chicago press (edited by Sztompka, Piotr)
- Merton, Robert. K, Barber Elinor (2004) “The Travels and Adventures of Serendipity - A study in Sociological Semantics and the Sociology of Science” Princeton University Press
- マートン, 中山「マートンの今日的意義：パーソンズとの対比で」(1987) アカデミア出版会
- Parsons, Talcott (1968 = 1937) “The Structure of Social Action” 稲上毅他訳 翻訳出版年(1976 ~) 「社会的行為の構造」
- _____ (1947) “The position of sociological theory” American Sociological Review
- _____ (1954) “Essay in Sociological Theory” Free Press
- Stinchcombe, Arthur L. (1975) “Merton’s Theory of Social Structure”
- _____ (1990) “Social Structure in the Work of Robert Merton”
- Sztompka, Piotr (1986) “Robert K. Merton An Intellectual Profile” St. Martin’s Press
- James, William (1978) “Pragmatism and The meaning of truth” Harvard paperback

Re-consideration of “Theories of Middle Range” — Mediation of theoretical thought and empirical inquiry in sociology —

KAWAMURA Yuuki *

Abstract: In this paper the author reconstructs Robert Merton’s “Theories of Middle Range” in terms of his sociological idea of science, and reconsiders the approach of “two-way traffic” between theoretical thought and empirical inquiry in sociology. The author could point out the following three essentials:

- (1) The fundamental starting point is the concept “Unintended consequences of intended action”. It emerges from the interaction between “the public record of sociological theory” and “the actual course of inquiry” in modern science. The actual course of inquiry is not reproduced from any elements of published theory, but cluttered up with the intuitive leaps, false starts, mistakes, loose ends, and happy accidents. The more problems occur, the more different the published theory is from the one intended at first.
- (2) “The published theory” and “the actual course of inquiry” are structured and structuring by “ethos of science” and “thought collective” in scientific community. Ethos of science makes for publishing theory in reductionistic manner, accumulating scientific knowledge. The thought collective makes for constituting thought style relative to groups of scientists, specifying ignorance, finding “serendipity” in the actual course of inquiry.
- (3) Those structures organize “recurrent socio-cognitive pattern”. The more scientific inquiry replaces ignorance with knowledge, the more specified ignorance emerges from the growth of scientific knowledge. There is a developing pluralistic cognitive structure of theories of middle range in consequence.

Keywords: Theories of middle range, “two-way traffic” between theoretical thought and empirical inquiry, the published theory, the actual course of inquiry, the reductionist fallacy, recurrent socio-cognitive pattern, ethos of science, thought collective, serendipity, pluralistic cognitive structure

* Graduate Student, Graduadte School of Sociology, Ritsumeikan University